

黒森新霧伎

山形県指定無形民俗文化財



黒森歌舞伎の魅力を探る

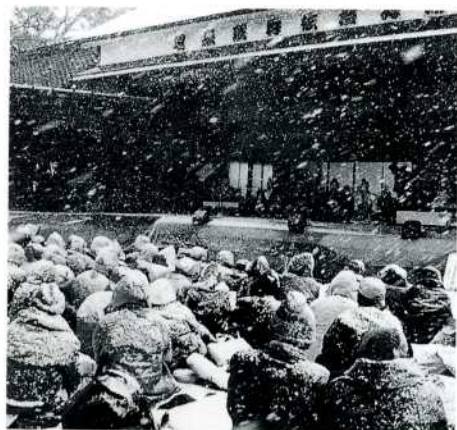
雪に蘇る村芝居

庄内の冬は立春を迎えてからが本番だ、といわれる。この地方では、節分の豆まきが終わった頃から、巻き返しのような寒気におそわれることがあるからだ。冷たい北西の季節風が吹き荒れ、地吹雪が舞い上がって道をふさぎ、人々を再び雪の中に閉じこめてしまう。こんな時は一日中氷点下の真冬日となるのも珍しくない。南の方から春の便りが届くというのに、さながら冬のあがきのような、そんな日々をやり過ごさないと、庄内の春はやってこないのである。

毎年、二月十五日・十七日の二日間、そのぶり返す冬の真只中、しかも降り積む雪の中で、村芝居黒森歌舞伎が上演される。

鎮守日枝神社に奉納されるこの芝居は、広い境内を棧敷（客席）にし、社殿に並ぶ常設の演舞場を舞台に演じられる。見物衆は厚く積もった雪の上に藁やゴザを

敷き、そこに座って見物する。芝居ならざる「雪居」である。時折、雪が舞い、風が吹き付けることがある。そして一瞬、白いペールに覆われたように何も見えなくなる。見物衆の頭や肩にも雪が降りかかって、棧敷も一面に白くなる。それでも芝居は休まずに続けられ、客もまた身じろぎもせずに、じっと舞台に見入る。



かくして、延々五時間にも及ぶ熱演が、薄ぼんやりとして宵やみに包まれる頃に、最後の幕が引かれる。

異様というか、雪の幻想とでもいおう

か、そこには、現実から遠ざかった別世界のようにして、おどかな村芝居が生き生きと蘇るのである。それ故に、「寒中芝居」「雪芝居」の異名をとり、夏に上演される福島県南会津郡の檜枝岐歌舞伎と並んで、東北の二大村芝居「冬の黒森・夏の檜枝岐」として親しまれ、広く知られるようになった。



村芝居のふるさと黒森

酒田市街から南に約九キロメートル行つた所に、酒田市大字黒森がある。戸数四百戸、人口千七百人の、よくまとまつた一つの集落で、日本海岸に連なる小高

くなだらかな砂丘を背にし、全面に広がる庄内平野の美田を耕しながら、畑作や施設栽培など多角的な農業を営む、裕福な地区である。この歴史は古く、大正十年（一九二二）地内に流れる赤川を切り開く河川改修事業で、堀削工事の際多数の石器、縄文土器、炉の跡などが出土したことから、先住民の集落跡ではないかと注目されている。（酒田市史）



開村は、鎌倉時代説もあるが、弘和元年（一三八一）黒森日枝神社創建（酒田市史）とあり、先年、同神社創建六百年祭記念の碑が建立されたこともあって、南北朝の頃ではないかとの説も出されている。

海、山、川、水田に囲まれ、こんもりと茂る樹林に包まれた黒い森には、きつと豊富な生活資源が蓄えられ、大きな集落が形成される条件が満たされていたに違いない。

中世末から近世にかけてこの村は更に成熟していくが、その過程で祭祀に伴う余興としての芸能が導入され、神社に奉納する神事芸能となり、同時に村人の格別の娯楽として定着し、受け継がれるようになる。



黒森歌舞伎の調査をしてこられた民俗学者丹野正氏は「黒森には、歌舞伎芝居の前に何らかの神事芸能が奉納され、村人の娯楽として伝承されていたと考えら

れる。二月十五日というのは旧暦の小正月にあたり、黒森ではこの日道祖神の祭典を挙行し、余興としてある種の芸能を演じていたものだろう。ところが、江戸時代の中頃になって、江戸の方から巡業してきた旅役者一座の歌舞伎芝居を見た村人がこれに熱狂してしまい、ついに習い覚え、やがてこの祭りに上演、奉納するようになった。つまり、従来の芸能から、もっと新しく面白い、そして勧善懲悪の思考を盛った歌舞伎劇に転向した。この新しい演劇は、村づくりにも寄与しながら次第に充実していった、やがて「地芝居」となる。それがいつの間にか、本来の祭典よりもアトラクションである芝居の方が大きくなり、更に近郷近在の人気をも集めて今日に至った」とみられる。

一座に保存されている記録や文書などから推して、この村芝居は、享保年間の中頃にはじまったとみられる。幾多の風雪に堪え、およそ二百六十年の年輪を刻みながら、昔の姿を今に残してくれている。黒森は、歌舞伎全盛期の頃の様子を、村芝居の中で見せてくれるいわば、歌舞伎のふるさとなのである。

組み立て式舞台と縄張りの枡席

黒森歌舞伎は「妻堂連中」と称する組織が一座をなし、芝居の上演とそれに関わる資料や財産の管理にあたる。組織の内部は、振者（または狂言方）、浄瑠璃、囃子（または下座）役者、衣装、床山、大道具、小道具、舞台などの各部に分かれ、総勢五〇余名で構成される。座員は原則として世襲制でしかもこの地で出生した男子とされてきたが、今はこれにこだわらない。長い年月、世襲制を維持することで伝統を絶やさぬようにし、父子相伝によって芸を磨き、競い合ってきたもので、これは、他の伝統芸能にも相通じることである。取り上げる狂言（演目または外題）は全部「時代物」（古典歌舞伎）である。村芝居が時代物を演ずるのは、全国どこも同じだが、上演台本が五十本もあって、しかもその多くを「通し狂言」つまり助段から終演まで長々と演じてきたというのは、特異である。今は、観客の好みに迎合するように、見せ場をつないで盛り上げるような構成となっているが、以前は、昼間から暗くなるまで日がな一日、雪中芝居が続いたのだから、素人芸にしては驚くほかない。舞台の構えや観劇風景も格別な趣を添え

る。時代が移り、生活が変わるにつれて失われたものもあるが、昭和三十年代頃までを振り返りながら紹介すると、まず、舞台は常設でなく組み立て式であった。掛舞台ともいうが、黒森では芝居小屋といい、村中総出でこれを組み立てる。



仮設とはいえ間口七間半（一三・五メートル）奥行四間（七・二メートル）大がかりなものを、雪を踏み固め、その上に建てる。それに花道もつけられ、下手には下座の控が、上手上段には太夫の語り座もある立派なものだ。板で屋根を葺き、両横と後方は葦簀で囲い、前面には定式幕を吊る。社殿は楽屋となつてこつた返す騒ぎとなる。舞台中央に置かれる二重舞台は、回り舞台で四隅に大きな木

車がつけられていて、場面転換の時は四人の黒子が出て柱にしがみつき、ぎいこぎいこと、大きな音を立てながら回転させる。なかなかうまくゆかず暫く芝居の間が抜ける事があつても、客は息をつめて舞台を見つめる。やっと回つて意外な場面が現れると客は声を上げ嵐のような拍手を送る。

昔、江戸の町をにぎわしたあの芝居小屋が東北の雪の中で、こうして再現されていたのである。今は組み立て舞台となつたが、そのころを知る者には惜しまれることしきりである。

さて、観劇風景だが、これも芝居小屋とならんで、なかなか風情あふれるばかりだ。村人は今でも棧敷と呼ぶが、広い境内に縄を張り、真ん中に抜き棧敷という特別席をこしらえ、その両側に村中の家の枡席をつくる。勝手に座つていいの



